

建築特集 高齢者施設

2017年3月号
No.1264

倉方俊輔

「悪」のル・コルビュジェ
第3回 答ええない男

さあ、「悪人」と解答欄に書き入れよう。理由は「時代」の反映者を自称することで、目の前のクライアントや住民を犠牲にしたから。

まさにル・コルビュジェの思う壺である。ル・コルビュジェ財団の委員長を務めたジャン・ジャンジュは、彼の欲望を的確に指摘する。

「革新者であり、理解されない人物であり、一徹な仕事人であるだけでル・コルビュジェは満足しない。革新者であり、理解されない人物であり、一徹な仕事人であるという虚像を自らつくりあげようとする」

革新的であり、理解されない自分。そんなイメージに「ベサックの失敗」はびびったりだ。悪名は無名に勝るのである。

「ル・コルビュジェのベサック集合住宅」は、住民による改変の優れた記録だ。原著が1969年に出版された時、著者はまだ28歳だった。「建築家は悪、一般人の住みこなしが善」といった凡庸で世間を受ける結論を警戒する知性によって、今も十分に読むに耐える。インテリア、エクステリア、街区といった多層的な観察に、インタビューを組み合わせて、建築専門家と住民双方の内的な矛盾に焦点を絞って導き出される結論は、推理小説のようにスリリングだ。

「あなた、道理にかなっているのは、いつも生活のほうで、まちがっているのは建築家なんですよ」。この本に収められたル・コルビュジェの言葉である。これを理由に建築家を悪とするお人好しかいるだろうか。話しているのは建築家だ。嘘つきのグレンタ人だ。本心を明かさない、建築家である。

この男は何も答ええない。堪えてもいない。

—[p.2-3に全文掲載]



光嶋裕介「ル・コルビュジェのある幻想都市風景《ベサックの集合住宅》
~Urban Landscape Fantasia with Le Corbusier 《Cité Frugès de Pessac》